中学二年生たちによるかくれんぼ

メネ@未確認

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
中学二年生たちによるかくれんぼ

【Ｎコード】
Ｎ５６９７Ｖ

【作者名】
メネ@未確認

【あらすじ】
子供の頃、僕たちは何でもできた。
＊というおはなし

（前書き）

たぶん改訂か削除します。

（・・）メネ

いったいどうしてこうなったんだ、と僕はいろいろと頭を抱える。
ちらりと彼らを見やる。
凄い。
ある意味、凄い。

――「はっはっは！　いいか、貴様のその刻印は偽物……。真の刻印『パイルバンカー』は、俺のものだあああああッ！」
――「ふん、ならばその刻印はお前にくれてやろう。我の持つ刻印は『パイルバンカー』にあらず。真の刻印とは、『黒きダイヤモンド』なのだ……！　所詮、その程度の武具では我が宝石に傷一つ付けられぬわ！　ふぅぁあああああーっははは！」
――「もうやめて二人ともっ。刻印は誰しもが持つ称号。どちらが正しいかなんて、あるはずがないのよぅ！」
――「黙れおネエ。つーか、刻印？　はッ、それより銃だね、銃。幻想なんかに浸ってねえで、現実見ようか。あーあ、妄想にはもう飽き飽きだぜ」

うん、だからどうしてそうなったんだろう。
一部始終を見ていたはずの僕でさえ、なぜこうなったかわけが分からない。
ええと、確か、最初は……。

「かくれんぼやろうぜ！」

唐突なその言葉に、僕ら四人は黙るしかなかった。
いったい何がどうなって「かくれんぼ」なんだ。僕たち、もう中二なんだぞ。そんな幼稚な遊び、恥ずかしくて堂々とできない。……そりゃ、ちょっとはやりたいけど。

「とりあえずさあ、いきなり変なこと言うのやめてくれねえ？　頭悪いとしか思えないんだけど」
「あたしもぉ。なんで『かくれんぼ』なのぅ？」

ちなみに僕たちは全員男だ。若干一名ほど、いわゆる「おネエ」という存在がいるけれど、男と数えて差支えはない。
本人に言ったら怒るかもしれないけどね。

「いいじゃんかくれんぼ、やろうぜ」

一人が乗っかった。

「じゃああたしもするぅ」

もう一人乗っかった。
……あ、この流れ、結局全員やる羽目になるんだろ。分かってるよそれくらい。

「僕もする」
「ち、しょうがねえな。俺もやってやるよ」

こうして、かくれんぼは五人グループの全員が参加することになった。

「よーおし、じゃあ俺が鬼なー」

かくれんぼの提案者が、はりきって宣言する。

これだけ聞くとまるで自分から進んで鬼になったかのような口ぶりだけど、実際は数十回にも及ぶじゃんけんバトルの末、屈辱の「鬼」という称号を貼りつけられたのだった。決まった時、彼が泣きかけたのを僕は見ていた。

そうして、かくれんぼは始まった。

そこまでは良かった、良かったのだけど……。と、僕は涙を流す。なにが原因だ、と自分に問い、あれしかないだろう、と自分で答えた。

きっとアレだ。アレが無かったら、こんなことにはなってないはずだ。少なくとも、かくれんぼの形を取っていただろう。

――さーん、にーい、いーち。もーういーい、かーい。と見せかけてもう行くぜ！

どこからともなく聞こえてきた妙な独り言を右から左へとスルーしつつ、僕は息をひそめる。

そして今気付いたのだが、近くにも一人隠れていたらしい。さっきの謎の声が聞こえた後、明らかに人が笑う声があった。位置からして、先に見つかるのは向こうの方かなあと考える。

そして案の定、隠れていた彼は見つかった。

鬼が妙に気取った声で、決め台詞を語る。

「――お前か。こんなところに隠れていたとは！」
なんだそりゃと呆れながらそっと眺めてみると、なぜか見つけられた彼の態度もおかしい。
なんだろうと耳を澄ましてみた。
「ふ……貴様、俺に向かって『お前』だと？　この刻印『パイルバンカー』を持つ俺に向けて……？」
なんだそれはああああっ、と盛大に呆れながらさらに眺めてみることにした。
鬼もその台詞に乗っかって、変なことを口走る。
「奇遇だな。俺も刻印は持っているんだ。どちらかが……偽物、ということだな。くっくっく……」
「勿論、偽物は貴様だろうよ。……試してみるか？」
「ふ、痛い目を見る前に降参する事だな。かかってこいッ！」

事の次第はそういうものだった。
要は、おふざけがおふざけを呼び、やがては黒歴史を生み出すということだ。
――「ぐっ……中々やるな！　だが、俺はまだ半分の力も出していないぞ？　ふはははは！」
――「なにを言う、我が全力を出しているとでも思っていたのか。だとすれば、とんだ笑い草だ！」
――「やめてぇっ。もう、これ以上争わないでぇっ」
――「はいはい、そういう遊び痛いから。もうやめて、現実見よう

な。あーばかばかしい、俺を巻き込むなよ」

ところでさ、かくれんぼ的には、僕の勝ちってことになるのかな？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5697v/

中学二年生たちによるかくれんぼ

2011年10月8日06時44分発行